

ちいさい秋はどこいった

その昔ダークダックスなどが歌った「ちいさい秋みつけた」（サトーハチロー作詞、中田喜直作曲）という童謡が好きでした。夏の終わりに誰かさんが見つけた秋の息吹が独特な表現で詞にされ、叙情あふれるメロディーがつけられています。月遅れのお盆の前後、暑い夏が続いていても、空気感とともに、ちょっとした出来事で秋の気配を感じ、気持ちがスッと落ち着き軽くなる、といった体験をお持ちの方は多いのではないのでしょうか。

同じ趣旨で立秋の日に詠んだとされる平安時代の有名な歌があります。

秋来ぬと 目には彩かに 見えねども 風の音にぞ 驚かれぬる（藤原敏行）

まさに風の音に小さい秋を見つけた、という歌です。しかし今年の立秋の8月7日を振り返ってみると、とても秋を感じる風情はありませんでした。35度以上の猛暑日が本格化しだしたところで、台風5号が直撃をして大雨洪水警報が出て対応に追われた日でした。

日本は全体的に温暖な気候で、春、夏、秋、冬の四季がはっきりとしていると言われます。そのため、自然と融合した文化も独特で奥深く多様なものが形成されてきました。その日本の四季の区分が崩れてきているように感じます。特に、私が最も日本らしい季節だと思ふ秋を感じる時期、機会が極端に少なくなっているような気がします。日本の気候が熱帯化しているのかもしれませんが。連日の猛暑が当たり前となり、長く残暑が続いた後、間もなく冬が来るようで、日本の四季が三季になりつつあるという人もいます。

都市化とも相まって、「ちいさい秋みつけた」に歌われたような「もずの声」や「秋の風」、「はぜの葉」の自然の情緒もだんだん感じられなくなっています。「心づくしの秋」（物思いに耽（ふけ）る、気を揉ませる秋の意）にじっくりと浸っている余裕もありません。

秋の夕暮れを詠んだ三夕の歌の一つで私の好きな歌があります。

見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ（藤原定家）

粗末な小屋と夕暮れ以外何もない荒涼とした海辺の秋の情景が見事に表されています。侘（わ）び、寂（さ）びの世界に通じる、派手なものは何もないことをいとおしく思うような日本独特の秋の味わい方です。こんな秋の本格的な復活を望むのは無い物ねだりになるのでしょうか。